



## こぶしの苗



二十日市の朝に死したる若き猫の

塚に二尺のこぶしの苗植う

忘れもしない平成十三年二月十六日の夕のことである。夫と私は市比野の温泉の帰りであった。家の裏庭口の前に「二羽のガラスがハタハタと舞い降りた。私達の車が近寄るとガラスはさつと逃げた。見ると道路に白い猫が横たわっている。

「あつ、セデェだ！」

夫と私は車を裏庭に入れると、慌てて走り寄った。抱き上げると左目が卵大ほどもガツと飛び出して、口から吐いた血が地面を濡らしている。ふさふさと柔らかな毛の下の体はまだ生温かいが、この無様の恰好では即死だと思った。

「セデェ・セデェ！」

私は大声で呼んだ。するとなんとはらわたをしはるような声で「ウーン」と返事をするではないか。

まだ生きていたのだ。私は洗濯物入れの籠に猫をそつと入れ、夫と今来た道に戻って、川内の犬猫病院へと急いだ。赤信号を待つ間もいらだたいしい思いだ。その間も呼べば懸命に返事をする。

お馴染みの病院ではあいにく先生が結婚式に呼ばれてお留守で、助手が近くの病院を教えてください。やっと捜し当てて駆け込むと、若い獣医と女の助手が犬の手当てをしている最中で、そこは二十四時間体制の犬猫の救急病院といったところだった。

若い獣医は「状態は良くないが、目はすぐに手術をすれば戻る」という。時間がかかるといっので一切お任せして近くの店で夕食をとって帰った。家に帰ると留守電が入っていて、手術は無事終わり、破けていた顎の骨も縫っておいだ、と言つことであつた。

翌朝病院に一人で行った。透明なプラスチックの酸素が補給されている容器に、点滴を受けてセディは横たわっていた。目は閉じられていた。呼ぶと頭を動かして前足をかすかに差し出す。撫でてやりたいが箱の中である。朝、夕の見舞いが三日続いた。その間一度も目は開かず、口の血痕が齒に干からびて着いたままであった。十九日の夕には呼びかけるとゆっくりと頭を持ち上げ向きを変えた。獣医が言った。

「飼い主だけには反応しますね」

きつとそれがセディの精一杯の努力で、最後の反応だったのだ。翌朝、病院から容体が変わったとの連絡があった。夫と駆けつけると院長と担当医が心臓のマッサージをしていた。私たちの到着までもたせる努力をしていてくれたのだ。叩くようなきついマッサージを止めると計器の針はスッと下がった。処理の業者がいると言われたが、段ボール箱に入

れて家に帰った。庭の何処かに私達で埋葬したかった。

セディはもう一月もすれば一才の誕生日が来る若い猫であった。東京から連れてきたナスビの孫で、母親はナスビと野良の間に一昨年生まれたピッピである。ピッピは子猫の時死にかけていたのを拾って私が育てたのだが、十カ月で母親になった。出産はなんと私達のベッドであった。まだ甘えん坊の子猫とも言えるピッピは夜中にうるたえて、何度も私たちを起こしたが、出産とは思いがけもしなかった。朝食後寢室へ行って見ると、七、八センチの二十日鼠の子のような白い子猫がベッドカバーの上のいた。一時間後にもう一匹その弟の方がセディである。兄貴は猫好きの出入りの店員さんにあげたのだった。昨年、ピッピとピッピの妹、野良の母親と三匹が子猫を生んだから大変な騒ぎとなったその顛末は「猫三昧」という作品になっている。

晩秋、三匹の母親と生まれた子猫もメスどもは全部避妊手術を受けさせた。結局家の中には東京からの二匹に母猫三匹、残った子猫五匹となっていた。家の外には全く余所者の野良の五匹がいて庭を徘徊しているが、おとなしい自分たちで始末しているのかお腹が大きくなっても増えることもないので、一日一回餌を与えてそのままにしている。

偏愛する気は全くなかったが、五匹の子猫の中でセディは特別の存在であった。柔らかな長い毛、ふさふさとした尾っぱ、オス猫らしく胸を張って座る姿が恰好よかった。小公子のセドリック、セディと名付けた。「ニヤア」とはなかず「ンー」と鼻を鳴らしてすり寄る。自分の名前も覚えないその他の日本猫とも違って、呼べば小犬のように駆け寄って来た。人を疑うことなく抱かれるので、私は連れ去られる心配はかりしていた。

春のいて来ると、セディもオスらしく夜の外出が

多くなり始めた。それでも一晩中帰って来なかったことはなかったのに、事故の前日は初めての外泊だった。昼にはいつものように他の子猫と丸くなって寝ていたのだが、神は私の偏執を解き放ったのだろ  
うか。

庭の竹山の隅に夫が穴を掘り、そこへ私は固く伸びたセディを寝かせた。夫は土を掛け上に大きめの玉石を置いた。病院の心尽くしの花束も供えた。

その日は二十日市であった。町の通りに植木屋さんやタコ焼き屋さんなど店が並んでいたのを、朝通りすがりに見ている。私は思い出になるような木を植えたかったので、夫に頼んで町に出た。そしてセピア色がかかった白のセディを徳ぶには、白のごぶしがふさわしいと思った。

早春の夕べ、買った苗木を一人で塚の脇に植えた。冷たい風が吹き抜けていた。